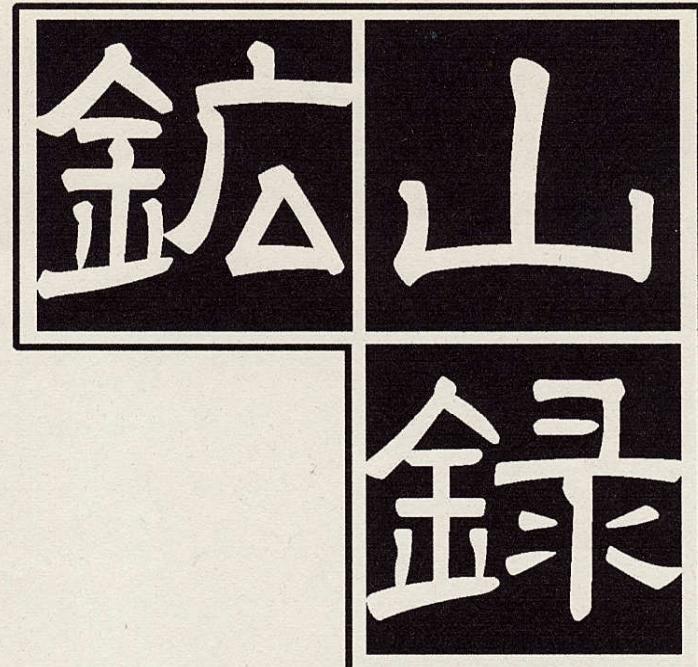


The Correspondence of
Noboribetsu City Nature Center

登別市ネイチャーセンター ふおれすと鉱山
ニュースレター



きたきつね

Illustrated by Hiyama T.

Contents

Vol. 9
June 2004

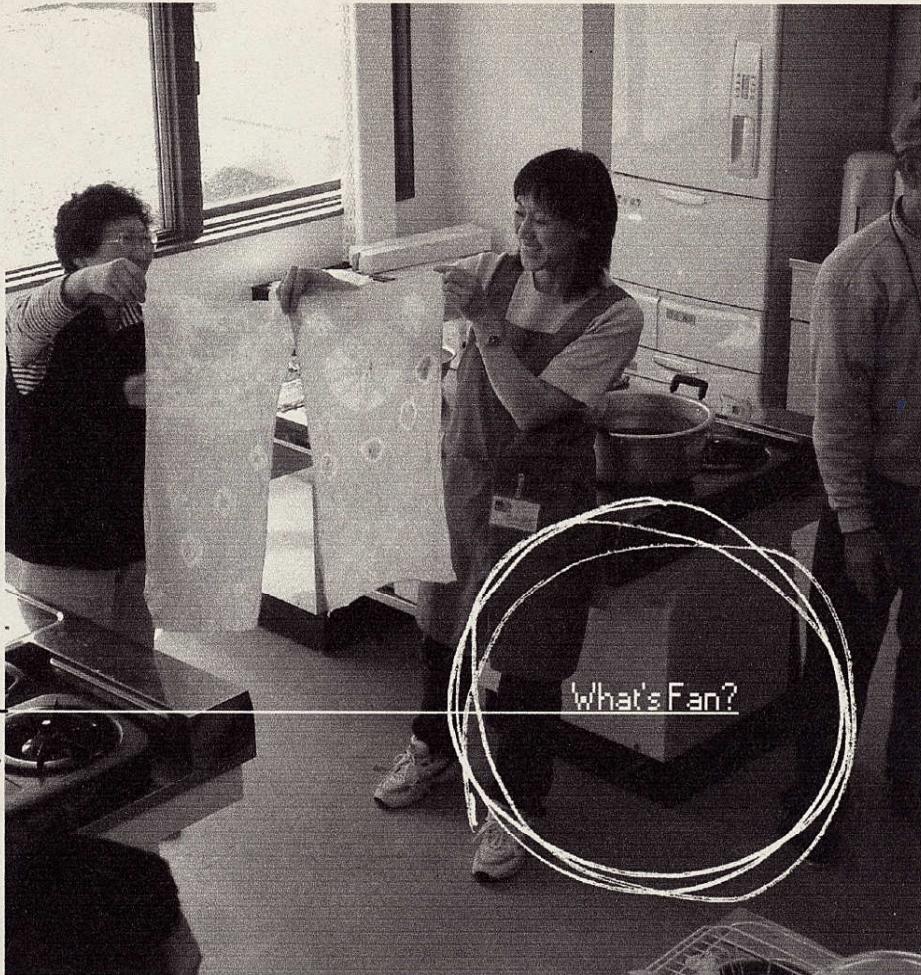
特集

ここまで来た市民との協働	2
オープンから 25 ヶ月の活動報告	4
使える小ネタ集	5
リトル・ヴォイス～リレーエッセイ～	7
お知らせ&わいるどれしひ	8

ふおれすと鉱山が掲げてきたコンセプトのひとつ「コラボレーション（協働）」。3年目を迎えるボランティアとのコラボレーションがうまく回りだしている。そこに関わる人々は、なにかしら楽しそうだ。どうやら、ここにコラボレーションがうまくいく秘訣があるらしい。

特集

ここまできた 市民との協働



スペシャルウィークで コラボレーションは実を結んだ。

コラボレーションのかたちとして着実にステップアップしているのが、「スペシャルウィーク」である。「スペシャルウィーク」とは、ふおれすと鉱山とモモンガくらぶを中心とした市民ボランティアが一体となり、総力をあげて地域の子どもたち・大人たちに向けて「遊んで学べるプログラム」を発信する、いわばお祭り的な大イベントである。このスペシャルウィークは、実行委員会の立ち上げ、ねらい・アイデアだしからはじまり、プログラム内容・日程について話し合い、準備期間・お試し期間を経て本番にいたる。もちろん、市民ボランティアのみなさんは、最初の実行委員会から一緒に関わっている。

「こんなプログラムだったら子ども喜ぶべ」「こうアレンジしたらうまくいきそうじゃない？」

スペシャルウィークのプログラムは、自分たちが思っている「やりたいこと」をかたちにできるチャンスの場にもなっている。自分たちがやって

楽しいことというのがまず重要である。さらに、そこに教育的効果や直接体験など、いわゆる'ふおれすと鉱山らしさ'を含ませていく過程には、開発していく楽しさもある。もちろん、'来館者のニーズ'や'旬の話題'も合わせて考える。スペシャルウィークに参加する側も提供する側も楽しくなくてはならないのがオキテなのである。

この春のGWで4回目のスペシャルウィーク。回を重ねるたびに、自主的に、より楽しく質の高いものを提供できるまでになっており、今までふおれすと鉱山に足りないと指摘されていた「大人へのサービス」も展開され、中高年のみなさんも遊びに来てくれるようになった。

それだけではない。「鉱山町の自然に詳しい人を育てて、案内とかもしていきてえなあ。」の一言から、モモンガくらぶが認定する「鉱山ネイチャーガイド育成制度」がはじまった。地域の自然を地域の人が知り、地域の人に伝えていく。そんな姿を夢見ての第一歩だ。講師は、鉱山町の自然を知る市民の面々。受講生が講師にもなり、講師が受講生になる。今年の受講生は16名。この秋には、鉱山ネイチャーガイドが誕生する。鉱山

で活躍する姿が楽しみである。また、初の試みとして、ふぉれすと鉱山とモモンガくらぶ共催の「子どもの事業」が第一歩を踏み出した。

「おれらの子どものころの遊びも、今の子どもたちにやらせてえなあ。」

「そだな。おれたちはよく秘密基地作って一日中そこにいたっけなあ。」

「冬には、そり作って、競争したべ。」

この会話から、「秘密基地を作つて泊まっちゃおう」「自分のそりを作つて、ソリ選手権に出よう」の企画が生まれた。そんな新たな挑戦もはじまっている。

ふれすと鉱山を場にして 生まれる活動と交流

ここまでコラボレーションがうまくきている秘訣は、何であろうか。まずは、関わっているみなさん自身が楽しさを感じているということにあると思う。自らの原体験や興味、バイタリティが、ふおれすと鉱山で展開する活動への原動力となっているのではないだろうか。また、関わったことがきっかけで、地域のみなさんの中に良き交流が生まれていることも事実だ。この良き交流が生まれるひとつのきっかけとなるのが、コラボレーションの終了後の'お楽しみ'である。しばしば、反省会と称して、打ち上げが開かれる。これが、単なる飲み会ではない。大人も子どもも参加するお楽しみプログラムなのだ。モモンガくらぶのメンバーには、小学4年生から大正生まれまでの幅広

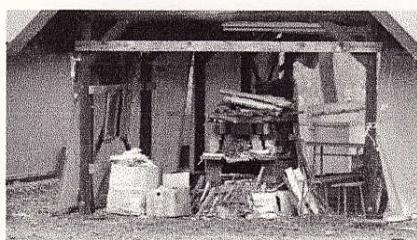
石窓
SPWの時には大活躍だった。
今後の設置が楽しみだ

い年齢層の方々がおり、また、仕事も所属も多種多様である。その多様な世代の大人たち、子どもたちがいろんな話をして、時には本気のカルタ大会にまで及ぶ。その交流の輪は、閉鎖的なものではなく、さまざまな面で広がってきてている。例えば、一緒に山登りに行ったり、ご飯を食べにいったり。さらに、各人が所属する市民団体同士の交流に発展していったり。でも、基本は、ふれあいと鉱山に集まる場があり、関わる場があるということだと思う。

つまり、どちらかがどちらかに依頼して行なう一方通行のかたちではなく、一緒に考えて一緒に汗をかく。失敗したら、一緒にまた考える。これが、ふおれすと鉱山流コラボレーションの秘訣である。さまざまな体験を共有し、直面する課題と一緒に乗り越えてこそ、コラボレーションが成り立つのだと思う。もちろん、根底には'楽しさ'がなくてはならない。今後もこのかたちを継続し、より実り多き'やりがい'を生み出していくことが重要だと思う。そのためには、市民参画の裾野も広げ、良き交流も広げていきたいと思っている。

これからもより多くのみなさんを巻き込んで、一緒に楽しみ歩んでいきたい。

text 遠藤 潤(Civic Coordinator)



鉱山案内

サクラの花も散り
山はすっかり緑の
木々に覆われ深緑の
季節になりました。
ふれると鉱山のミ
ズナラやシラカバも
緑を濃くする中、枯
れて倒れそうな木が
あるので、「切らな
きや危ないね」とY
さんと話していたら
この老木、切られて
は大変と思ったのか
数日後、なんと葉を
繁らせました。ホン
トウの話・・・

これからは川遊びや自然散策に最高ですが、目が回るような忙しい時期を迎えますがスタッフ一同ガンバリマス。

も新しい葉がめばえ
お茶をつくるには最
適です。若い葉はみ
ずみずしく、煎つた
時の香りがよく、おい
しい熊笹茶が作れる
ので、是非遊びが
てら作りに来てはい
かがですか。

オープンから25ヶ月の活動報告

●ふれすと鉱山の主催事業

GWスペシャルウィーク 5/1~5

800名ほどの方が来館し、とてもぎやかな5日間になりました。鉱石万華鏡作りや草木染め、魚拓にミニミニラフト、石釜ピザなどなど…。のべ60名の方々にお手伝いいただき、支えられた、地域に根ざしたイベントという色が益々濃くなっています。8月のスペシャルウィークにも皆さんの参加をお待ちしております。



指導者ステップアップ講習①—野生動物を学ぶ・伝える— 5/22~23

プロジェクトワイルドという手法を用いて、鉱山町の野生動物の生態をゲーム形式でわかりやすく伝えるプログラムを作成、実施することに挑戦しました！参加者の皆さん、鉱山町のイタチやクマ、ハヤブサ、魚などになりきって、楽しみながらプログラム作りをしていました。今後はそれの方が各地域で、その技をご披露するそうですよ。

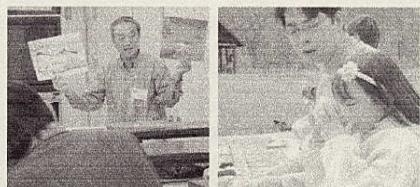
●モモンガくらぶの主催事業

野鳥観察会 5/4

雨天のため、室内でビデオを見ながらの講座が開かれ、楽しく鳥についての知識を深めることができました。講座終了後に雨が上がり、急遽ウォッチングに。そこでは、シノリガモを観察することができたりと思いかけない収穫があり、参加者も喜んでいました。

野点 5/5

天候に恵まれた、とても気持ちの良い野点となりました。秋からおなじみイベントとなり、野点を楽しみにやってくる参加者も。初めての方も作法を教えてもらいながら、気軽に楽しむことができ、春を感じながら皆さん穏やかなひとときを過ごしていました。



KoNG講習会 4/17~18

KoNGは、モモンガくらぶによる手作りのガイド制度で、鉱山町の自然や歴史を多くの人に伝えていただくために始めました。また、受講者の資質をさらに高めふれすと鉱山に貢献してもらう事も目的です。動植物、歴史に対する知識はもちろん、どのようにして伝えるか、どんなプログラムが的確なのかなど、ガイドとしての基礎編の講習となりました。秋には受講者が実践テストを経て、独り立ち出来ることを期待しています！

モモくらワンティハイク 4/25

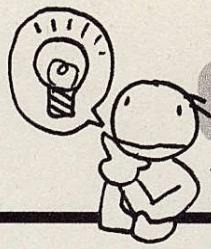
少し肌寒い日でしたが、野鳥のさえずりが参加者の心を和ませ、道路縁の野草は疲れを癒してくれました。沢を見下ろす「茶店」を開設して休憩したり、のんびりと新緑を楽しんで目的地の「三段の滝」に到着しました。三段の滝では山菜づくりでランチタイム。フキの葉っぱ、コゴミ、イタドリなどが次々に揚がってはあちこちから「美味しい～」の声、まさに旬の食材で大いに「春」を感じた一日でした。



ボランティアの
つぶやきコーナー
コレが熱い！！ 「ふれすとに石窯があったらしいよねえ」
の一言から物語ははじまる。構想6ヶ月、今年の4月、
いよいよ石窯プロジェクト始動！

石窯はふたつのタイプに分けられる。燃焼室と焼き床が別の2層式、両方一緒の1層式だ。第1回石窯会議において「1層式よりかっこいい！」との理由で2層式に決めてしまったが、このかるへい決断が奥深い石窯の世界へ足を踏み入れるきっかけになろうとは、その時はまだ知る由もなかった。毎週末ふれすと鉱山に通って試作を重ね、焼き上げたピザは数十枚（焦がしたピザも数十枚…）。おかげで石窯についてはいろんなことが分かった。まず、思ったよりも焼き床が冷めやすい。鉱山町の気候のせいだろうか？石窯の本やHPに出てるものとはずいぶん勝手が違う（腕が未熟なだけか？）。焼き床の形によっても蓄熱性は変わるようだ。薪を燃料にする以上、煙の対策も避けては通れない。手前側に煙突を付けて、燃焼室から焼き床を包むように熱を回し、煙と一緒に上から抜けば解決（…なのかな？）。ついでに煙突にスモーカーを付けて薰製も作れたら…（ついつい欲が出る）。レンガを組み、薪をくべ、手作りピザの焼き上がりを待つ（焼き芋などもあり）、というなんとも贅沢なひとときを夢見て、「（仮称）石釜くらぶ」では今秋までに基礎をしつらえた本格的な石窯づくりを目指している。まあ、あまり急ぐ必要もないよな～と、最近は感じていたりもする（なんてったって『永遠の未完成』だもんね！）。

（室蘭市・沼田）



使える？ふぉれすと鉱山 小ネタ集⑤

ふぉれすと鉱山のプログラムは、小ネタ（アクティビティ）の連なり。
ここでは使えるアクティビティを特別にご紹介。

目力（めぢから）をつけるよ

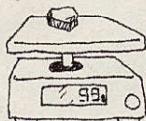
森の中からいろんなものを見つけることは、簡単なようで実はとても難しいものです。特に、普段からあまり外に出ない人にとっては、草むらに隠れているような小さな虫やきれいな石など、目の前にあるにもかかわらず、通り過ぎてしまうことが多いです。そこで、今回は、そんな都会生活に染まってしまった人でも本来持っているはずの、目力（めぢから）を取り戻すようなアクティビティをいくつかご紹介します。

カモフラージュ

ご存知、ネイチャーゲームのアクティビティです。林の中で範囲を決めて、様々な人工物をそっと隠します…といっても、枯葉の裏や土の中に埋めてはいけません。その林の風景にうまく紛れ込ませるように置きます。紛れ込ませる人工物は、ぬいぐるみとかフィギュアなど、イッパツで見つけられる簡単なもの（見えるものがいい）から、輪ゴムとかゼムクリップのような、かなり難易度の高いものを対象者に応じてバランスよく用意するとよいでしょう。事前にその範囲のゴミをしっかり拾っておくこと、紛れ込ませる人工物の名前や個数を書いたメモを用意すること（隠した本人が、どこに何を隠したのか分からなくなります）がコツです。



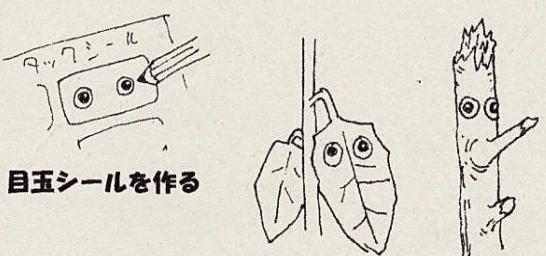
100グラムの石を探そう



料理用の電子ばかり（1グラム単位で重さがはかれるもの）を用意します。活動としてはきわめて簡単。100グラムの重さの石を探せばいいだけです。しかし、これがかなり難しい！見た目と実際の重さが違ったり、たった1グラム足りなかったりと、はかりとフィールドの間を何度も行ったり来たりすることになるでしょう。簡単なアクティビティですが、質量だと岩石の構成要素だと、かなり深いところにまで話を発展させることができそうです。対象者によっては、100グラムの見本をあらかじめ用意したり、はかりを使える回数を制限したりして、難易度を調整するとよいでしょう。

森の妖精さがし

タック紙（封筒とかに住所を印刷して貼るやつ）に、マジックで直径1センチぐらいの「目玉」を書きます。それをはさみでくりぬいて、森の中に出かけます。森の様子をじいっと見ていると、木のうろや、おおきな葉っぱたちが、だんだん人の顔に見えてきたりします。そこに、さっき作った目玉を貼り付けると…、おかしくもカワイイ森の妖精たちが目を覚まします。これもまた単純なアクティビティですが、森の見方や価値観を一気に変えることができそうです。



森にあるもので
顔を作ろう。
とてもユーモラスだよ。

これらのアクティビティは、これから野山でいろんなものを見つけて行く前に、いわば「野山に出かける練習」として行うと、かなり効果的です。あまり準備に手間がかからぬいものばかりですので、キャンプのちょっとした空き時間や遠足などでもご活用いただけます。うまくアレンジすれば、屋内でも展開できますし、展示などにも可能性を広げられそうですね。

(上田 Program D)

森の楽しみ方

たつあんのドロノキ日記アナログ版

①春から初夏はバードウォッチング

春、木々の葉もまだ萌え出ていない時期、鉱山の森は鳥たちのさえずりでにぎやかになります。ここで繁殖をむかえる鳥たちが結婚相手を探すのに懸命に活動する頃です。

バードウォッチングには最適な時期でもあります。しかし、あれだけにぎやかだった鳥たちが緑あふれる森になる今頃は、すっかりおとなしくなってしまいます。つがいになった鳥たちが子育てにいそしんでいる頃なのです。よく観察して見ていると、意外なほど身近なところに巣をつくり雛たちにせっせとエサを運んでいます。親鳥の羽ばたきを合図にいっせいに鳴き出す雛。雛たちの糞をくわえて飛び立つ親鳥。巣の中の掃除にも余念がありません。そんな姿がとてもたくましく愛らしく思えてきます。ピイピイ鳴いている雛たちの姿を見ることはめったにありませんが、エサをもらっている様子やその成長ぶりを思い浮かべながらそっと見守るひと時が、とても幸せだったりします。6~7月にかけて雛たちは成長を遂げ巣立ちの時を迎えます。

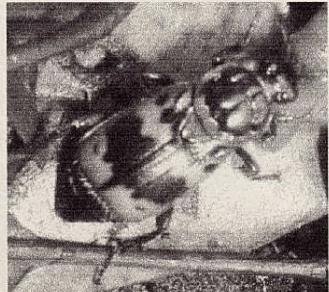


餌を持って帰ってくる親鳥。
おしゃいへしゃいしている雛たちを見るとやっぱりうれしいの
でしょうけど……。

text & illustration 本山達朗

埋葬虫

ももしょいハカセの ~~スナギラメグミの~~ 森のひみつシリーズ⑨



「埋葬虫」と書いてなんと読むか知っていますか？知っている人は漢字検定2級は軽いでしょう（？）。答えは「しでむし」。シデムシは森で動物の死体を食べています。動物の死体を食べる昆虫はたくさんいるのですが、シデムシの仲間がそれらの象徴として「埋葬虫」なんて不幸な漢字を当てられた理由は、死体の下に産卵のための穴を掘ってその土をまわりに捨てるために死体が埋まっていくように見えるからなのだと思います。

鉱山町でも時折見かけることがあります、森が不健康だからでしょうか、他の地域の森に比べると少ない気がします。死体を分解して土に還し、森を豊かにするために一生懸命働くシデムシたちは、その生態や外貌から好かれないタイプの昆虫ですが、森の健康を支えてくれる重要な生き物なのですよ。

リレーエッセイ Roots and Shoots リトル・ヴォイス

僕がこんな仕事を商売にしていなくて、どこかのボランティア団体に所属するということがあったら、それは間違いなく「モモンガくらぶ」だ

宮本 英樹

GWに開かれた「スペシャルウイーク」で「モモくら」のみなさんはそれぞれの得意分野を活かし、来館者にプログラムを提供した。魚拓教室あり、野点あり、石窯ピザあり。そこには各人がやってみたいという主体性とそれを認め合う受容性がある。まずそれがいい。精神的な居場所づくりである。そしてそれをおせっかいにも人に薦める（プログラム提供する）ところがまたよい。

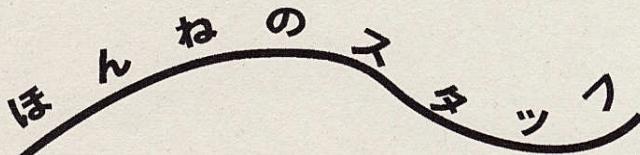
イベント終了後、モモくらの人々が石窯に集まり、ピザ大会が始まった。小中学生、大学生、行政職員、地域のお爺さんなど、実に色々な人がピザを片手に今日の成果について楽しそうに話している。長続きするためのコツがイベント後いかに「旨い酒やメシを食う」かにかかっていることをよく知っている。それが断然いい。

そんなモモくらには何か、僕等が忘れつつあったような古きよき市民活動やコミュニティを見るのである。

ボランティアにお手伝いしてもらうには実は施設側にもコストがかかる。意見の取りまとめや日程調整、お膳立て。それに見合うだけの効果を発揮している施設ボランティアがどれくらいあるだろう？団体が成長し、自立していく過程でこのコストが下がり、それ以上のパフォーマンスを発揮していく。ふおれすと鉱山とモモくらは3年目を迎える、費用対効果でいえば、効果が上回ってきている実感がある。事務局と市民団体を合わせた施設自体の成長の現れだと思う。次はモモくら自身がマネジメント能力を持ち合わせた団体へ成長し、ある意味では事務局をおびやかすような存在になってほしい。



今、もっとも注目を集め
る新進気鋭のコーディネー
ター、プランナー、教育者。
彼の手によって次々と生
み出される施設、プログラ
ム、教育手法は新しくもど
こか懐かしい。NPO法人ね
おす理事。ふおれすと鉱山
コーディネーター。道産子。



⑤赤フリースと 半額シール

真っ赤なフリース。これがふおれすと鉱山のスタッフジャンパーである。夏も肌寒い鉱山町では欠かせないアイテム。とても着やすいため、普段着としても重宝する。そんなわけでこれを着て街へ繰り出すことも多い。そのせいか、地域の方々がよく声をかけてくれる。子どもたちは名前を呼びながら飛びついでたりする。「おおう、久しぶりだね」なんてじゃれ正在と「お母さん、この人ふおれすとの人だよ!!!」と紹介もしてくれる。「どうも、こんばんは」と照れ笑いをするその片手には半額シールの貼られたおかずを持っていたりして気まずい思いをすることもある。先日おかしを真剣に選んでいるときにも、炊事遠足の買出しに来ていた子どもたちに見つかってしまった。でもそんなことばかりではない。「あら～Eさん、ちょっと寄ってお茶でも飲んでく？」
「は～い!」「今日コロッケ作るけど食べてくかい?」「は～い!!(嬉)」…地域で暮らすということはこういうことなのだ。

(E)

